公益社団法人
日本山岳会
群馬支部報
JAC GUNMA
創刊号
平成26年
11月30日

日本山岳会群馬支部報創刊にあたり

公益社団法人日本山岳会群馬支部　支部長　田中　壯佶

日本山岳会群馬支部報創刊にあたり、発足時の経過を述べ、支部長の挨拶に代えさせていただきます。

平成25年早春、八木原さんが私の部屋にやって来ました。開口一番、“仕事も一段落したでしょうから、また一緒にのんびり山歩きしませんか”でした。互いに突き出た腹を気にしながら、最近の山登り、新版「日本三百名山登山ガイド」の分担執筆、そして日本山岳会群馬支部設立に話が及びました。平成25年４月14日、群馬県在住の日本山岳会員が一堂に会し、５月24日、群馬支部設立準備会発起人（出席者９名全員）が決まりました。この間、28名中４名の会員からは種々の理由で同意が得られませんでしたが、支部規約も検討され群馬支部設立に集約されました。

平成25年７月13日、前橋市において、森日本山岳会会長以下５名の本部役員同席のもと、群馬支部設立総会が開催され、出席者20名（委任状９名）全員の賛同を得て支部設立が決定しました。森会長は挨拶の中で、支部活性化は日本山岳会の最重要課題の一つであることを強調されたあと、直ちに32番目の支部として、日本山岳会群馬支部を承認して下さいました。

日本山岳会は来年創立110周年を迎えます。登山者・登山・山をめぐる環境は大きく変わり、会員の減少と高齢化、若手リーダーの育成は日本山岳会にとって喫緊の課題になっています。また、日本山岳会の“公益社団法人”への移行、“山の日”の制定によって、幅広い登山者層への新たな対応が求められていると思います。

日本山岳会群馬支部は、個人の集まりであり、登山スタイルや山との関わり方も様々な会員20名でスタートしました。平均年齢68歳は決して若くはありませんが、個性豊かな会員に恵まれています。そして、他支部からの移動者を含め、新たに12名の会員を迎えました。豊かな山に恵まれた群馬にあって、良き仲間と共に登山を楽しみ、各自の“自分の山”が深まり、広がることを願っています。支部長として十分お役に立てませんが会員皆さんのご協力よろしくお願い致します。

リレーエッセイ①「山岳文化財保存」

「終活」という言葉を聞いたことがあると思います。誰でも歳はとります。山岳資料館を運営していると言うこともありますが「もうたいした山にも行かないので昔使った山道具を貰ってくれないか？山の本を引き取っては貰えまいか？」との問い合わせが増えています。

なけなしの虎の子で買って大事にしてきた「命の次に大切」だったピッケルも古本屋でやっと捜して買った高かったあの本も、本人が亡くなってしまえば残された家族にとっては「ただのゴミ」です。

ただ捨てられたのではたまりません。寄付をするなり友達や後輩に引き継ぐなり考え、準備をしておく時期に来ていませんか？合掌。

（八木原圀明）

特集 山への想い 山の思い出

例会ショートスピーチ

マナスル登頂

吉田　恭一

2013年10月２日、吉田恭一氏は「アドベンチャーガイズマナスル峰公募登山隊2013」の一員としてヒマラヤ第８の高峰・マナスル（8163m）の頂上に立った。1956年に日本山岳会隊が初登頂を果たした日本人初の8000m峰マナスル。日本山岳会会員として、吉田さんには特別な思いがあったに違いない。

そのマナスル登頂から１年もたたない14年８月、吉田氏逝去の報に接することになろうとは…。運命の非情さを感じざるを得ない。あまりに急で悲しい別離になってしまった。ヒマラヤでの雄姿にあらためてご冥福を祈りたい。

（2014年３月19日の例会ショートスピーチで発表）

※この原稿はご家族から寄せられた資料をもとに編集担当がまとめました。

ダイエットならヒマラヤ(Island Peak 6160m)

小野里節司

2011年11月、カトマンズで５日間天気待ち。ようやく小型機でルクラ着（この年２回墜落があった）。歩きはじめて11日目にIsland Peakに登頂。ネパールは６回目だが、ピークは初めて。

丸沼プモリの宮崎勉隊長以下隊員７名中４名が登

ることが出来た。最高年齢の70歳10カ月にとってはきつかった。今回利尿剤のダイヤモクス半錠を4000ｍぐらいから飲んだのが良かった。

11月17日夜中１時50分にアタックキャンプ（5600ｍ）を出た。隊員１人にシェルパ１人が付く。最後のコルに出るのに傾斜45度から60度、約400ｍの雪壁を、フィックスロープとユマールを使用。両腕の力は限界寸前だった。頂上稜線に出てからは、ナイフリッジを30分で、８時10分登頂。山頂から、エベレストの南峰ローツェがすばらしかった。空気のありがたさをしみじみ感じる。

ベースキャンプに午後１時着。雷鳥が出迎えてくれた。お陰で５kg減量。１カ月で元にもどった。

蛇足：途中、八木原隊長、西田敏行主演「植村直己物語」の撮影舞台Pokalde Peak（5693m）が見えた。八木原隊長は“お金を貰いながら”ついでにエベレストも登頂した。後日この縁で、西田事務所ではどうせ落選する候補だから行かない方がいいと反対したが、本人が八木原の総決起大会に応援に来た。

名塚秀二が居酒屋に案内し、横のお客が、俳優の西田さんによく似てますねーと言うと、「よく皆にそう言われるんですよ」と答えた。

（2014年５月21日）

山と私　その関係

黛　　利信

数年前のある期間、勤務上の制約から、遠い山や携帯電話の通じない山には行けない状況になった。このとき、私は山との関係を考えることが多々あっ

ショートスピーチも平成26年９月例会までに４回を重ねた。４人のスピーカーには山への想いや思い出を熱く、また静かに語っていただき、深い共感の時間を過ごすことができた。ここにあらためてそれぞれのスピーチの要旨やハイライトをテーマに、諸氏に依頼して原稿を起こしていただくこととした。

スピーカーのおひとりでマナスル登山を語られた吉田恭一さんは８月に病気により永眠された。つつしんでご冥福をお祈りするとともに、家族からご提供いただいた写真や資料をもとに、故人のマナスル登山の模様を振り返ってみた。

た。二十歳から今に至るまで、たくさんの山に出かけ、山行は大切な生きがいだと確信していたので、禁断症状が出るものと心していたのである。

しかし、体力低下は当然としても、ストレス症候は出ず、意外であった。思えば、子供たちが小学生の運動クラブにいた頃はその父兄として土日をつぶし、あるいは海外赴任で「そこに山がない」時期を含め、通算で十数年も山行ゼロが続いたこともある。私にとっての山はその程度なのかなと、寂しくもあり、山に申し訳ない気持ちになったりもした。

そして、時々は山行に出かけることができている今、その日その時は体力面や精神面の限界を確認する程度にはきつい計画をやり遂げているものの、過去のブランクを取り戻すような頻度で出かけたいとは思わないのだ。山は私にとって、主食や主菜ではなく、ビタミンやミネラルのようなものなのかもしれないが、いまだ納得できる正解を見いだせてはいない。それを探すために、これからも山行は続くのだろう。（2014年７月23日）

私のお宝　登山杖とピッケル

大竹　誼長

大正時代父が使った登山杖

登山杖は長さ130cm、赤樫棒の先に鉄の石突がついている。明治34年生まれの父が100歳で亡くなった時、物置を整理していて見つけた。

父は学生時代（大正中頃）にたびたび山登りをしており、その頃使ったものと思われる。棒は八角形で握り良く、固くしまっている。古いアルバムに杖を持った父が槍ヶ岳を背景にした写真が写っていた。杖には焼印が押してあり、「西岳小屋、喜作新道縦走、焼岳、清水屋ホテル」等読み取れる。徳本峠を超えたのだろう。

私が山登りを始めた頃、母はやかましく反対したが、父は何も言わなかった。

強い味方、「門田」のピッケル

大学山岳部に入って、道具が必要になった。貧乏学生だった私はバイトで稼ぎ、秋葉原の安売り店や質流れものを物色して歩いた。

このピッケルを初めて使ったのは昭和33年頃、マチガ沢での春合宿だったと思う。シャフトの長さ84cm、ピックからブレードの先まで31cmのこのピッケルは近藤勇の名刀「虎徹」のごとく私にとって強い味方だった。

何度危機を救ってくれたことか。思い出しても身震いするのは38年12月24日、西黒尾根ザンゲ岩近くの凍てついた急斜面でアイゼンをひっかけ転倒。瞬間ピッケルを打ち込み５、６ｍ流され停止。足が震えしばらく動けなかった。

今では２月の赤城と４月の尾瀬行きで使っている。はじめは気にしていなかったがよく見ると「SAPPORO BERGHEIL K.I.W」の刻印がある。門田製であろう。私の大切な宝物である。

（2014年９月17日）

第30回全国支部懇談会に参加して

平野　紀子

日本山岳会に入ってそろそろ30年というのに、支部懇談会には今まで一度も参加したことがなく、群馬支部誕生でやっとそのチャンスがやってきました。田中支部長、小野里会員と３名で行ってきました。

メイン会場は秩父市の「農園ホテル」で、入口には秩父を象徴している雲取山荘の大きな生花が迎えてくれ、グリーンのおそろいのジャンパーの埼玉支部60余名の甲斐甲斐しく動き回る受け入れ体制に圧倒されました。

二つの講演、（１）「埼玉県の山岳遭難事例と安全対策」（県警山岳救助隊飯田副隊長）、（２）「日本地質学発祥の地、秩父からの報告」（吉田氏）は、お二人のスライドを使いながらのお話が実に内容豊かで充実していました。まさに現地の人でなければ知ることのできない奥深いものでした。

そして懇親会は盛大なフォルクローレの生演奏、秩父屋台ばやしと地酒の鏡割り、各支部より持参の一升瓶の勢揃い。森武昭会長、重廣恒夫支部代表のスピーチ、乾杯と、いやがうえにも盛り上がりました。

一夜明け、両神山へ60余名、武甲山へも70名近くが参加。私は琴平丘陵コースへ40余名の仲間と出発しました。ふるさと歩道を写真家の宮崎稔さんの名ガイドで歩き、秩父札所十一番常楽寺に下りました。実はハイキングはこの後まだまだ続くのですが、所用で途中退散し、一路、西武秩父駅へ一目散。池袋までの車窓からの眺めは日本の原風景。山々の中腹に立つ民家のたたずまいに郷愁を覚えました。

埼玉支部の方たちの結束力のレベルの高さと見事な組織力に１年生の群馬支部生は感嘆し、大きな刺激を受けて帰ってきました。

事務局だより

【活動・事業・関係イベント報告】

〈７月〉

■2014年７月例会（７／23）
本部会務報告
「山の日」制定記念行事について
「チャレンジキッズ」「上州武尊山スカイビュートレイル」について
新入会員紹介
ショートスピーチ（黛）　ほか

〈８月〉

■チャレンジキッズ（８／24　谷川岳マチガ沢）
■吉田恭一会員葬儀（８／26）
八木原・金井が参列

〈９月〉

■2014年９月例会（９／17）
本部会務報告
「チャレンジキッズ」「上州武尊山スカイビュートレイル」について
ショートスピーチ（大竹）
■日本山岳会支部合同会議（９／20・21　東京）
田中・根井が参加
■上州武尊山スカイビュートレイル（９／20～22　上州武尊山系）

〈10月〉

■「ぐんまの山の日」記念講演会（10／５　前橋・日本山岳協会専務理事　尾形好雄氏）
■日本山岳会全国支部懇談会（10／18･19　埼玉）
田中・平野・小野里が参加

〈11月〉

■2014年11月例会（11／19）

【今後の予定】

〈12月〉

■支部長会議・晩餐会（12／６　東京）

〈１月〉

■支部新年会（１／21）

〈２月〉

■関東四支部合同懇談会（２／７・８　千葉）
■チャレンジキッズ（２／28　玉原高原スノーシュー）

〈３月〉

■2015年３月例会（３／18）

【新入会員】

加藤　　仁（伊勢崎市）
鈴木　良徳（藤岡市）
※11月理事会で承認予定

【寄稿のお願い】

山行報告・評論・随筆など会員のみなさまからの原稿をお待ちしています。原稿送付先は下記のとおりです。
根井　康雄（日本山岳会群馬支部報編集担当）

※日本山岳会各支部、各種山岳団体で支部報、会報等お送りいただく場合もこちらへお願いします。

【訃　報】

吉田　恭一会員（吉井町）　８月26日逝去　64歳

日本山岳会群馬支部報　創刊号　2014年11月30日
発　行：公益社団法人　日本山岳会群馬支部
Tel 027-323-6713
〒370-0844　高崎市和田多中町11-31（田中方）
発行者：田中　壯佶　　編集者：根井　康雄
印　刷：上武印刷株式会社